

# 「島留学」田舎こそ最先端

人口減  
につぽん

次世代をつくる

教育 2014

2



中東ドバイの日本人学校から、日本海に浮かぶ隠岐諸島の高校へ。双子の兄弟の岩井元さん、玲さん(16)が2年前に選んだ道だ。

2人が通う島根県立隠岐島前高校は、松江市からフェリーで3時間かかる。日本の大学に行くためには日本の高校がよいと考え、夏休みに帰国。いくつかの高校を見て回った。温かさを

感じたのが決め手だった。「高層ビルが立ち並ぶド

バイとは正反対の、隠岐の自然の豊かさに驚いた。地域全体が学校。ドバイの学校より小さいけど広い」

隠岐島前高校は離島ながら、生徒数が2008年度の89人から今年度の156人へとV字回復し、注目されている。

高校はかつて統廃合の崖っぷちに立っていた。97年に77人いた入学者は08年には28人に落ち込んだ。高校

が消えれば、15歳以上の若者がいなくなる。地域にとっては、死活問題だった。

「島の最高学府を守れ」。

島前の3町村長や住民らが08年に立ち上がり、高校の魅力化構想をつくった。通いたい高校にすれば生徒は増えるはず。「ピンチはチャンスだ」と考えた。いくつもの試みが「逆転の発想」から生まれた。

「小さいことはよいこと

だ」と10人前後の少人数習熟度別授業を始めた。「田舎は都会にはない自然や人のつながりがある」と地域に根ざしたカリキュラムをつくった。生徒は船のダイヤや改定案から、島の太陽光発電まで考える。「仕事がないから島に帰れない」で

はなく、「仕事をつくりに帰りたい」人を育てようと、課題を解決する力をつける教育を目指した。

島にはコンビニもゲームセンターもない。「だからこそ工夫する力や粘り強さが磨かれる」と都会から生徒を受け入れる「島留学」を始めた。この春入学の「留学生」は31人。8月の島での見学会には全国から親子140人が参加した。

島根県立大学連携大学院の藤山浩教授(中山間地域研究)は話す。「日本の高校は『蜘蛛の糸』の主人公のように、成長神話の糸にすぎり、人より先に上がっていないと教えてきた。『東京すごろく』をよしとして生徒を都会に送り続けた。

島前高校は人とつながり地域で生きる別のモデルをつくっている」

高校がいま取り組むのはグローバルな視野を持ちながら、足元のローカルな地域社会をつくる「グローバル人材」の育成だ。10月には2年生がシンガポールに5日間出かけ、シンガポール国立大生に島の課題を英語で発表する。離島での資源リサイクルは、冬場に観光客に来てもらうには……。

「都会の島のシンガポールで、田舎の島の高校生が挑む。おもしろいじゃないですか」と常松徹校長。

なぜ、この高校は人を引きつけるのか。カギは、都会から移住した人々の知恵を借りたことにある。

# 「よそ者」島の知恵袋

## 大企業から転身情熱教室

人口減  
にっぽん  
次世代をつくる  
教育2014

1面から続く

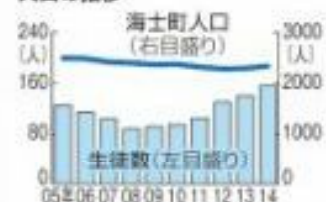


公立塾「隠岐国学習センター」のゼミ。生徒らは「自分が地域にできること」をテーマに話し合った。センター長の豊田庄吾さんが、グループのそばに立って見守っていた＝島根県海士町、氏岡真弓撮影

8月末の夜7時半。島根県立隠岐島前高校近くの海士町の公民館に、生徒が30人ほど集まった。公立塾「隠岐国学習センター」のゼミに参加するためだ。センターは、海士町など島前地域3町村が離島の生徒たちに学習の機会を届けようとしてつくった。156人

の島前高校生のうち、110人が通う。この日のテーマは「自分が地域にできること」。海士町を視察に来た熊本県山都町の議員ら20人とグループに分かれ、話し合った。司会役は、センター長の豊田庄吾さん(40)。リクルートの関連企業を経て、企業や学校の研修を担う会社で講師をしていた。2008年、中学と高校への出前授業で島に来て、町からスカウトされた。一度は断ったが、「もう一度

隠岐島前高校の生徒数と海士町の人口推移



に。同級生も次々転校していった。「日本のふるさとを元気にしたい」。その思いに火がついた。高校の危機を乗り越えようとして町が知恵を求めたのは、島外の人々だった。ソニーを辞めてきた岩本悠さん(34)もその一人。中学校の出前授業で来島し、町から相談を受けた。「ここは将来の日本の縮図。未来の教育モデルをつくりたい」と決心した。町役場に席を置きつつ、高校の「魅力化コーディネーター」として動く。地域の課題を考える科目では人脈を生かし、海外の大学や企業に協力を求める。トヨタ自動車、IT企業のDeNA、ベネッセ……。人が人を呼び、若者が大企業から転身し、島に集まってくる。田舎暮らしにそこがなくては、自分のしたいことに挑む人が多い。ジョセフ・クアッシさん

(29)はガーナ出身。「都市への人口集中はガーナも同じ。島前地域から学びたい」とやってきた。高校で国際交流を担当する。

## 地元の人材育成実る

地域の人材を育てる高校の狙いは実りつつある。隣の島の出身で法政大3年の近藤弘恵さん(20)は高校時代、島前地域への旅を企画する活動に参加して、地域の料理を出した。「喜ばれ、自分の食べていたものに誇りを感じた」。将来は地元の島にカフェを開き、島内外がつながる場を作りたいと言う。高校2年の原恵利華さん(17)は「地域の課題を考える授業が、むちゃくちゃ面白い」。地元の人と開きで交流する。街づくりの会社を起すのが夢だ。町が高校をより立て、高校が町の未来をつくる。60年減り続けた町の人口は増加に転じ、2年間で52人増、23339人になった。山内町長の目標は「教育の島、子育て島」で未来を開くことだ。高校の魅力化、社会人向けの学びの場などを盛り込んだ町の計画は、内閣官房の地域活性化モデルケースに選ばれた。名付けて「世界一の『下田舎』モデル」という。

## 「選ばれる田舎」問われる努力

### 島根を3年取材 記者は

今、「人口減」がクローズアップされているのを見て、全国の意識が島根に迫りつつある、と感じている。4月に県の人口が70万を割るなど、ここで教育や過疎対策を取った8月末までの3年余りは、島根県が人口減対策の先進地になっていると実感する機会が少なくなかった。その一例が、高校の魅力化プロジェクトだ。聖域りな発想で全国から人を集める隠岐島前高校

に刺激を受け、県は2011年度から、中山間地の高校にも助成を始めた。地元中学生が減るなか、県外募集に力を入れ、今年度は、夏休みに中山間地の高校を見学できるバスツアーも企画した。中国山地の一角、人口35000の川本町にある島根中央高校。生徒数330人余りだが、今年度、県外生が28人に倍増した。保育所などの就労体験先を町が調整した

り、地元の意見を参考に学習センターを立ち上げたり。地域とのつながりが深まったという。「地域で支える」。「地域に根差す」。この数年、地域と高校にそんな意識が高まっているのを感じる。「これからは田舎が選ばれる時代」と取材で聞いたのが印象に残っている。人口減を解決する対処法を見つけていくことは簡単ではないかもしれないが、「選ばれた田舎」になるためには、地域が持つ力を高める努力がこれまで以上に必要になってくると思う。

(島根県子)

「『よそ者』、『若者』、常識を覆す『ばか者』が島を愛する」。高校のある海士町の山内道雄町長(76)はそう語る。

交流する。街づくりの会社を起すのが夢だ。町が高校をより立て、高校が町の未来をつくる。60年減り続けた町の人口は増加に転じ、2年間で52人増、23339人になった。山内町長の目標は「教育の島、子育て島」で未来を開くことだ。高校の魅力化、社会人向けの学びの場などを盛り込んだ町の計画は、内閣官房の地域活性化モデルケースに選ばれた。名付けて「世界一の『下田舎』モデル」という。